

事遊展 + 忘年会

新趣向で成果上げる

OISが毎年行っている「会員の会員による会員のための作品展・事遊展」と、これも恒例の「忘年会」、この二つの催しを合体した形で昨年11月26日(土)、iPhoneで知られるApple StoreのあるアーバンBLD. 心斎橋9階で行われた。

そのため、事遊展は一日限りの開催で、作品は自分で持ち込み自分で展示、終了後は自分で持って帰るという方式で、出品する人も手軽さを実感したと思われる。

事遊展の作品は18人・47点(数え方で多少変わる)に及び、そのほとんどが今回のテーマである「木」にまつわる作品であり、テーマを設けることの大切さが実証された。

展示が終わると、最優秀賞を決めるための参加者全員による投票が行われ、忘年会に移行した。

忘年会の飲み物や料理はケータリングによるもので、それはそれなりに楽しむことができた。その中で、作品についてのコメントを出品者一人一人に述べてもらう時間を設け、制作意図や苦労話を聞くことができたのは意義ある試みだったと思われる。

最優秀賞に輝いたのは、今回の検定に合格し入会したばかりの木村さんの「ミニチュア家具」で、実に、投票者21人のうち13票を獲得した。木村さんは以前からプラモデルを作っていたキャリアが活かされ、素晴らしいデキであった。

投票数とは別に、一番多くの作品を出品した「最多賞」、一番大きな作品の「最大賞」、逆に一番小さな作品の「最小賞」がお遊び賞として選ばれ、それぞれ山口さん、高橋さん、瀬部さんに贈られた。

ケータリングによる、また、貸し会議室をパーティー会場に仕立てた忘年会も、事遊展の作品やトークなどで盛り上げることができ、一定の成果を収めたといえる。

(記・奥田 忠彦)



自分の作品の説明をする高橋顧問



最優秀賞の木村さんの作品



河野会長の挨拶でスタート

南野副会長の発声でカンパイ



和やかな会場風景

11月5日・KISバスツアー同乗記



原風景にふれる旅

あまり寒くもなく穏やかな秋の一日、KIS・京都支部主催のバスツアーにOISから4人で参加しました。

京都駅に朝7時20分集合でそのツアーは始まりまし

た。京都駅を出発し、道の駅「味夢の里」にトイレ休憩で寄ったあと天橋立港に到着、ここから伊根港に向けて遊覧船で航路を楽しみます。

伊根港は周囲5kmにわたって230軒あまりの舟屋が立ち並び、国



向井酒造のたたずまい



天橋立の文殊堂

の重要伝統的建築物群保存地区に指定されています。この景色はどこか懐かしくて、日本の原風景を感じさせる美しさが今でも大切に残されているようです。

船を降りたあとは、江戸時代から続いている「向井酒造」に立ち寄りしました。お酒は得意ではありませんが、この酒造所は古代米で作られた「伊根満開」という赤色のお酒が有名です。

昼食は道の駅「舟屋の里」でいただきました。特に新鮮なお刺身と魚の煮つけのおいしさが口を、舌を満足させてくれました。

昼食後は現地のボランティアガイドさんの分かりやすい説明を受けながら伊根町を散策し、実際に使用されている舟屋内部も見ることができました。

最後の見学先は「舞鶴赤レンガ博物館」です。日本のレンガの歩みや、舞鶴市内に今なお数多く残っている赤レンガの建造物の模型や写真を見て博物館を出ると、秋の日は短くすでに太陽は落ちていました。

毎回参加させていただき感じることですが、バスの中でのおやつや飲み物など、暖かいお心遣いありがとうございます。楽しい一日をKISの皆様と過ごせたことを感謝いたします。(記・南野 江以子)



舞鶴赤レンガ博物館



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>
blog <http://oisblog.exblog.jp>
E-mail ois@jp-interior.or.jp

発行者：河野
編集者：田原(第3事業部長)
スタッフ：瀬部・石渡・山田・朝日
加茂・今井・守屋
五代(第1事業部長)
事務局：岡崎・奥田

飛翔

羽ばたく一年に!

No.103

厳か & 和やかに

年明け早々の1月8日、「OIS初詣・新年会」が行われました。参加人数は19名。

まず、お初天神(露天神社)で初詣。このお初天神、近松門左衛門の「曾根崎心中」のヒロイン「お初」にちなんで「お初天神」と呼ばれるようになったことで知られますが、先の大戦の際、米軍機に撃たれた機銃跡が残っている史跡としても有名です。

天気はあいにくの雨模様でした。拝殿で、OISの発展と会員皆さんの活躍と健康を祈念するお祓いを受け、南野副会長が代表して玉串奉奠、お神酒をいただいた後に社務所前で記念撮影を行いました。その後、近くのお好み焼きの店「ゆかり 曾根崎本店」に移動して新年会。ビールで乾杯の後、食事を楽しみながら歓談。料理は



慈照寺・観音殿(銀閣)の鳳凰



平成29年“酉”を迎えて・・・

副会長 田原 妙子

「申酉喧(さるとりかまびす)しい」と言われるとおり、めでたい気分もいつのまにやら、今年はとても慌ただしい幕開けとなりました。ア〇ノミクスよりト〇ンプの字を目にすることが多く、インテリアの業界を含む日本の経済も先が見えず右往左往しています。

その中で、流されず自分を失わず、自分のしたい事すべき事を手掛けていくことが大切です。

好奇心と、先の先を見すえて研鑽を忘れず、知識と技術が増えることを楽しみましょう。

ネガティブな不満批判するよりもポジティブな意見と行動を。意見は交流を作り、仲間を育て、新たな展開を生むでしょう。

OISもそんな意見を求めています。今年もよろしく願いいたします。



新年会では、割り箸で作った鉄砲で射的を行う予定だったがさすが場所がなく、第二候補の川柳大会を行いました。方法は、各自が書いた7音と5音を集めてでシャッフルして配り、決められた上の句、下の句と組み合わせ読み上げるというものでしたが、適当に組み合わせられた川柳でも、意味の通じるものが多く大いに盛り上がりました。(記・木村 嘉兼)

豊臣秀吉ゆかりの「多田銀銅山」を訪ねる秋のハイキング

ハイキング(英語Hiking)とは、健康の為あるいは知らない土地を見聞したり、自然の風景や歴史的な景観を楽しむため、一定のコースや距離を歩くことをいうそうです。近年では「ハイキング」という呼び方は少し古い感じとなり、「トレッキング」「山歩き」などの言葉が使われやすいようですが…。

11月3日の文化の日、秋晴れの一日にOISの秋のハイキングが行われました。スタートの能勢電鉄「日生中央駅」からゴールの「道の駅・いながわ」まで約10Kmの猪名川町を楽しく歩きました。国登録有形文化財の「旧富田邸」、国史跡の「多田銀銅山」の坑道、山道、溪流沿いの道、車のビュンビュン通る国道、とバラエティに富んだコースです。



旧富田邸(静思館)

スイスジュネーブ旧市街のはずれに中国・日本美術専門の美術館で大富豪・故アルフレッド・パウアー氏が集めた磁器が主の、立派な石造りの邸宅の「パウアー・ファンデーション東洋美術館」があります。パウアーは明治36年頃、日本の貿易

商で美術工芸の専門家であった富田熊作と出会い、二人の美術品に対するセンスが一致していることがわかると、以後パウアーは富田を信頼して沢山の美術品を集めました。富田は、当時日本・中国の美術品を欧米に輸出し、巨万の富を築いた大阪高麗橋の美術商社「山中商会」のロンドン支店長でした。顧客はイギリス王室、ロッキンジャー財閥、フェノロサなどのコレクターを担当。大正11年、50歳で退社して、京都で個人的に古美術商を営みます。昭和7年から3年かけて顧客を接待するという目的に沿って、精魂の限りを尽くして故郷に建てた建築物が「旧富田邸」で、現在は猪名川町立「静思館」になっています。井戸水を汲み上げる給水塔や水洗トイレがあり、書斎を床下暖房にしたりと当時では画期的な快適空間です。

華麗なヨーロッパ文化に精通している富田が江戸時代の豪農の屋敷を模し、構造や建具が和風建築様式のシンプルなデザイン。そこへテーブルや椅子を自然に取り込み、和と洋のクロスオーバー発想が見事で、一見の価値があります。

(記・吉矢 祥子)



ちょっと一服のメンバー

TALK-PAL⑦ 2016.10.19

若者の奮起を期待

協会に在籍して48年になります。大阪でも最も古いメンバーの一人に入ると思われます。久々にトークパルに参加して昔話に花を咲かせることになりました。

トークパルに若い方がこれてないのが残念です。今と昔とでは仕事の環境も大きく変わっています。仕事の上とか人間関係とか、いろいろ悩みもあることでしょう。我われがこの道で長年経験したことで何かアドバイスできることがあれば、いつでも相談に乗りますから参加してください。トークパルはそういう場でもあります。

若い方々が毎年何人か検定試験を経て入会されていますが、協会の催しに参加していただかなければ、高齢化社会と同じように高齢化協会になってしまいます。協会が今後も存続していくためには、我われが努力して魅力ある協会にしなければならないことは明らかですが、若い方々の力が必要です。何ができて何ができないのか、みんなで考えようではありませんか。若い方々の奮起を期待しています。(記・宮本 誠三)



TALK-PAL DEBUT

トークパルに初めて参加しました。この日は2016年最終回、OISとしては2回目の忘年会とでもいえるトークパルです。

トークパルの案内には「中身は簡単です“初めて”というハードルを飛び越えて下さい」と書かれていました。会費は無料で食べ物か飲み物持ち込み方式のため、何を持参するか悩んだ末、帰省した時に買い求めた地酒を持って会場へ向かい、到着すると、先に来られていた皆さんに快く迎えて頂き、あっという間に

ハードルを飛び越えることができました。

TALK-PAL⑧ 2016.12.19

部屋の中央に1600mm角のテーブルがあり、その上の中華料理屋のような回転台には、既に刺身や寿司、手作りのフライやサンドイッチ等、いろいろな食べ物が並び、不思議なことに、その周りをミニチュアの阪急電車が走っていました。お酒も、珍しい日本酒、焼酎、ワイン、ビール等豊富で、色々な食べ物やお酒を味わいながら、難しい話題、柔らかい話など取り混ぜて話を続け、参加者が増える度に乾杯、そしてまた話し続けるという、何とも楽しいひと時でした。

テーブルの上に気になる木柱(アンズとペニカナメモ子の枝で、奥田さんの庭の木だそうです)が幾つか並んでいます。25mmφ長さ70mm~25mm位で、上部はほぼ45度にカットされ、切り口は手間暇かけていぬいに磨かれてあります。その面に顔の絵を描くための木柱でした。参加者が思い思いに描かれた顔はとても可愛く綺麗な出来栄でした。私も描きたかったのですが、アルコールが程よく回りその時は描けず、木を頂いて帰り落ち着いて描くことにしました。

フレックスタイム制で集合はまちまちでしたが、帰りは最終まで全員が時の過ぎるのを忘れ歓談していました。

次回もぜひ参加したいと思います。

(記・寺田 勉)



会員の仕事 石渡 由華さん



会社名：株式会社石渡靖一郎塗装店
職種・業：塗装業
携わっている仕事や内容：ゼネコンの下請業者として塗装に関する依頼や相談に応じ、見積りをしていきます。一般の依頼にも応じて、現地に赴き提案させていただいています。

やりがいを感じることや楽しみ：仕事をしていて一番の楽しみは、やはり、何もなかった空間に建物が出来上がっていくのを実際に目に見えることです。出来上がっていく工程や経過の末に完成を目にするととても感慨深いものがあります。また、塗装に関する相談を受けて提案させていただき、性能が発揮できたり、喜んでいただける時はとても嬉しいです。

大変だと思うことや失敗談：実際には、希望する仕上がりが難しかったり、様々な要因により希望に添えなかったり、妥協したりなど辛いことが多いです。ルーティンワークのように対応してしまい思わぬ失敗も起こります。工事現場での「ヒヤリ・ハット」等はそれに尽きると思います。

今西さん、安らかに…

OISの元副会長、現常任理事で本部SJITの理事でもある今西隆次さんが旧臘6日、64歳の若さで急逝されました。

氏は1976年登録の古くからのメンバーで、大阪の名門・富士屋木工で10年間腕を磨いた後Ryuデザインオフィス設立、2年後に㈱スタジオ・A2として法人化されました。家具・インテリアを本業とするメンバーが減るなか、貴重な人を亡くし惜まれます。彼のことで、天国でもきっといい仕事をされることと思います。

また、陶芸教室などに奥さんやお子たちを連れてこられる家族思いの良きパパでもありました。心からご冥福をお祈り申し上げます。



神経研ぎ澄まし石と対話

年の瀬も押し迫った12月13日、年末恒例となった宮後先生の篆刻教室に参加しました。自身では通算4回目の参加です。

まずは篆刻の歴史や字体の話を聞き練習を兼ねて用意された少し柔らかめの石で来年の干支『酉』を彫ります。用意された印材には参加者それぞれに対し違った字体で『酉』の字が描かれており、一つの漢字でいくつもの文字形があるというのも篆刻の魅力だと思います。

篆刻の印には二種類あり、文字の部分彫る白文と文字や輪郭を残して彫る朱文ですが、どこに使用する印かによってどちらが良いなどもあるようです。

印台に石を固定し彫っていくのですが、石を彫る道具を印刀、その彫り方を運刀法と呼び、手前に引いて彫るのを<引き刀>、突いて彫るのを<突き刀>というそうです。

早速、あらかじめ字入れしてもらっている石を彫り始めますが、言うは易しで、力加減が難しく欠けたらどうしようと思うと力が入らず彫れないし、ぐっと力を入れると、残しておかなければいけない部分まで削れてしまいます。

ゆっくり慎重に…でもしっかり力を入れて…みんな真剣に彫り出すと、おしゃべりもなく静かになりますが、時折「あっ!」とか「うっ!!」とか聞こえてくるので余計に緊張してしまいます。

ひとまず形が彫れば先生に見てもらい「ここをもう少し細く」「ここはもっと深く」などと指導を受けて更に彫っていきます。

皆それぞれ思い思いの印ができた時点



無口になり真剣そのもの

楽しい土いじり

恒例の陶芸教室は、一部の希望もあり例年より1週間遅れの10月30日(日)、好天の下、いつもの丹文窯で開催されました。

参加は田原さんと友人の西尾さん、河野さんに娘さんとお孫さん、寺田さんと私(小長谷)、事務局の岡崎さんの8人、人数は少なかったのですが、その分、静かな中で作陶に集中できたのではないのでしょうか。

窯元の大将が無愛想だったので岡崎さんは気にしていましたが、大将は工芸家であっても商売人ではなく、工房の空き時間を有効に使いたいということでしょうから、あまり気にすることはないと思います。逆に、あまりニコニコ愛想を振りまかれると、何かあるのでは、といらぬ勘繰りをしてしまうかもしれません。

土いじりの後のパーティーは岡崎さん力作?のおでんや、焼ソバにはちょっとウルさい私が作った焼ソバなどで、腹痛を起こすこともなく、ゆったりと楽しい時間を過ごしました。



筆者筆の登り窯のスケッチ

今年の陶芸教室は例年より1週間遅い開催だったため、窯元から駅までの帰路にある丹波黒枝豆の販売所が少なく、寺田さんは買いそびれてしまいお気の毒でした。

(記・小長谷 光)

◆好評の連載、瀬部明さんの「書とインテリア」の最終回は、紙面の都合により次号に掲載します。ご了承ください。

筆者の作品



で先生に試しに鈐印(けんいん・印を捺すこと、捺印・押印と同じ)してもらいます。それを見て更に補刀をしていただき、もう一度鈐印し問題がなければ完成です。補刀の最後の仕上げに、撃辺(わざと印刀で輪郭を叩く)を施してもらうのですが、そうすることにより古い趣が出て、素晴らしい印に仕上がります。

頼んでいた印材とは別に家にあった印材も使いたいとお願したところ、市販のものは粗雑に切断されているので、石の面を整えることから始めないといけないと言われ、それには、紙やすりで粗い順番に#80→#300→#600→#1000と印面を削って平らにしていけます。先生曰く、ガラスの上にびたりと吸い付くように置くことができれば完了だそうですが、それはなかなか難しい作業です。少し大きめの印材だったので大目には見てもらいましたが、吸い付くまでには程遠い仕上がりでした。

私は今回、練習用の『酉』のほか、自分の干支の『辰』も彫り、合計3つも篆刻できました。

先生が見るに見かねて手を加えてくださるなど、まだまだ難しさを痛感しましたが篆刻の奥深さや魅力を実感できる時間を過ごすことができました。

書道家は一人で30個ほどの印をもち使い分けをしているそうです。私は書道家ではありませんが、これからは機会があれば毎年少しずつ増やしていきたいと思っています。

(記・五代 晋一)